
back ! ! !

若桜みずき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

back!!!

【Nコード】

N4795V

【作者名】

若桜みずき

【あらすじ】

「何で、あんたみたいな表の人間がこの学園におるん？」

親の転勤により、俺の人生が180 変わる。

黒歩学園・・・そこはマフィアやヤクザの幹部になるための知識を学ぶ為の、つまり裏社会教育学校であった。

そうとは知らず、転校してしまった俺<五反田希里>

「抗争じゃあああああ！！！！！！！」
「ええ！？？」

そいつらは俺の非日常を日常と化している。

「あんた、ちゃんと前見とかんと・・・ケガするで銃口つきつけられるのも、慣れてしまっのだからつか。」

あはは・・・。

てか、俺の青春を返せ！！！！

プロローグ

「転勤することになった」

そう、父親が言った

「「「へー」」」

俺以外の家族、母さん、兄貴、弟は無関心

「へー・・・つて、ええ！？転勤！？」

俺は、思わず大きな声を出す。

「ちよつと、うるさいわよ希里。」

母は手で耳を覆いかぶせている

「いや、てか何で俺以外は衝撃受けてないんだよ！？」

「そつだ希里、お父さんはそのリアクションが欲しかったんだ！！」

あ、何か褒められた。

「いつ引っ越すの？」

弟の由貴が父さんに首を傾けて聞く

「え、明日」

「……、明日あああ!!!??」

「「「へー」「」

何か、おかしい家族がおかしい……。

「「「へー」「」

「「「へー」「」

「は?何、皆どうした?」

「「「へー」「」

「「「へー」「」

「ど、どうなってだよ~~~~!!!」

「つて、おきて!!きーくん起きろ!!!」

「うわぁ!!……由貴か……、それより夢?」

朝の日差しがカーテンから漏れている

今日の天気が快晴だな、こりゃ

「きーくん、どうしたの?うなされてたよ?」

「な、何か変な夢を見ちゃって」
今でも、思い出すだけで怖い・・・というかおかしい。

「はあ、本当に怖っ、じゃなくておかしい夢だった」

「僕、さっき

『HEY、HEYへーたくん』ていう絵本を読んだけど関係ないよね？」

「うん、それだ」

「とじろで、きーくん」

「ん？どっした」

「はやく準備しなくていいの？」

「何の？」

「だって、今日はお引越しの日だよー!!」

忘れてた……、それは夢じゃなくて本当だったことを。

黒歩

「希里、学校へ行く準備はできた？制服とか大丈夫？」

母さんが、心配して俺の部屋に来た。

今日は、新しい学校に通い始める日で

小学校や中学校1年生の時のときめき感は全くもってない。

「まあ……、できたはできたけど……

制服が黒服というのが……」

明らかに、制服にしては生地が厚いと思うんだけど。

「何言ってるの、かつこいいじゃない!!軍隊服みたいよ!!」

お母さんはキラキラの笑顔で、俺の制服に見とれていた
妙に恥ずかしくなってくる……。

「おお、何？希里の新しい制服？」

げ・・・兄貴!?」

ドアから、ひょいと顔を出して、こっちをみている

「へえ、かつこいいじゃん!!新しい学校で、いい女の子見つかるよ?

まあ、大丈夫か。俺の弟だし」

兄貴《五反田有馬》は、一言で言うと「チャライ」

毎回いつも違う女の人と歩いているのを見かける。何股しているんだろう・・・。

だが、おれより頭が良く運動神経抜群。

「似合ってるってお兄ちゃんも言ってるんだから、自信持ちなさい」

お母さんが、俺に向けてピースするが

「いや、別に、そこは問題ではなく。」

「あ、そういえば、お母さん。香水変えた?良いね」

でた!!

「お兄ちゃん、すごい!!わかったの!!さすがね」

誰だ、こんなチャライやつを産んだのは・・・お母さんまで口説くつもりか!!

俺は、苛立ちながら家を出た

「さて、と。なんだっけ？学校の名前？」

俺は、ポケットから紙を取り出す

そこには、手書きの地図と学校名を書いていた

「黒歩学園か、変わった名前だなあ」

交差点を右。塚畑病院をまっすぐ。2つ目の信号機を右。
郵便局を左。

やたら、頭がこんがらがる。この地図と文での案内をかいたのは、
兄貴。

「兄貴。絵心だけないんだよね」

もう、地図はあてにならない!!!

「カラオケしょっぱ」ミサワ」を左に進んでいくと、

そこがゴールって………」

書いてある通りに進み、顔をあげた

「ま、まさかここ?…な訳ないよねー。」

嘘であって欲しかった。

今にでもお化けがそんな洋館。手入れも行き届いてなく、荒れている植物。

そして、黒歩学園と書かれているプレートは完全に錆びていた

「ははは。……ってまじかよ。」

俺が、目を通したこの学園のパンフレットには

『創立2年のピカピカの校舎!!』なんて書いてあったのに!!

「絶対20年は、たってるな」

とにかく、門をくぐり校舎に入り、職員室に行こう

黒歩学園の門を俺はくぐった

まず第一段階、ミッションクリア

その時だった

門をくぐり抜けた瞬間、叫び声がきこえた

「よける!!!!!!!!!!その男子!!!」

「え?」

俺は声の主の方に、顔を振り向けた

シュッ

なんか俺の横を通りすぎる

それと、同時に俺の頬に生暖かいものを感じる

頬を触ってみると、触った手は赤の色に染まっていた

「っ、血……なんで!？」

足に力が入らなくなり、地面に座ってしまっ

そして、あたりをよく見るとあらゆる武器を持ったたくさんの生徒たちが
戦っている。

「アンタ、そこどき」

俺の目の前に、誰かが立ちはだかった

顔を上げて真っ先に目に写ったのは、両手にもっていた二丁拳銃。

そして、その人は俺に言った

「あんた、ちゃんと、前見とかんと……ケガするで」

銃口を俺に向けながら。

友達1号???

額に感じる冷たい感触。

「っは？」

思わず、そんな言葉が口からこぼれた

今の状況を把握できない

今日、7時に起きて。朝ごはんを食べて。新しく通う学校の支度を
して。

新しい学校に来て。

ただ、それだけはず……

「お、俺……」

何かしたか？

いろんな思いが頭の中でフル回転する

「これで、終わりや」

その人は笑みを浮かべる

ゆっくり引き金が引かれると同時に、俺も目をぎゅっぎゅぶる

「さっしなう。」

キーンコーンカーンコーン

その状況に相応しくない、POPなチャイムが鳴る

「なんや、もう終わりか」

額に冷たい感触が消える。

俺も恐る恐る、目を開けると、

銃口を向けてきた彼が、地面に座っている俺に向かって、手を差し伸べていた

「え？」

「はよ、いかんと先生から怒れるで！！はよ、立ち！！」

さっきとは、違う雰囲気。

俺は、手を出し、ぐいっと引っ張られる。あまりにも力強く引っ張られた

「あんた、大将のくせにやけに、ヘタレやな……」

「何……？大将って。」

「何言ってるねん！！大将は、大将やる？このゲームのボスやないか！！」

ゲーム？何を言ってるんだ！？

俺はかなり困惑中……。

その俺の表情を察してか、彼は目を丸くする

「ま、まさかあんた大将ちゃうんか!？」

「よくわからないけど・・・俺は大将じゃないし、今日転校してきたばかりだから!！」

「転校生? ああ!! そういえば、萌黄が来るとか来ないとか言ってたよな。」

彼は首をかしげ、考えこむ

キーンコーンカーンコーン

2度目のPOPなチャイム。

「っや、やばい!!そんなことより、はよ教室いくで!!2度目の
チャイムは
死を告げるチャイムや!!」

彼は、俺の手を引つ張って校舎に向かう

あまりに、走る速度がはやすぎる。引つ張られてる、こっちの身に
なっほしい

「あの俺、職員室に。」

「何?、ああ、俺の名前は さかもと 阪本京けいや!!」

違う、完璧、そんなことは聞いてない。

「だから、職員室に……」

「もっとスピードあげろぞー!」

やっと阪本……くん、の走りが止まる

「はあ……はあ……」ほっ!」

完全な息切れ状態の俺。

「ここや、俺の教室。」

彼が指さす先には、1年拾組というプレート

「違う。俺は、職員室に……」ほっ!」

「職員室?それなら、隣。」

言葉の通りとなりを見ると、そこは職員室。

「あ」

腑抜けた声、自分でもそう思う。

つまり、第2ミッションクリア？

真実

「し、失礼します」
緊張で、声が震えていた

職員室の扉を開けると、そこには……………

「いや〜ん、治家先生のエッチ？」

「そう、言わずに今日飲みに行こうよ」

《ナンパ現場》

ボタン

条件反射で、扉を閉めてしまった……。。

「って、治家先生!!!生徒の前で何してるんですか!?!」

再びドアが勢い良く、開き、さっきとは違う若い男の先生が出てくる

「君、もしかして五反田希里ごたんだ きりくん?」

「は、はい」

「待ってたよ、!!」

僕は今日から君が転入するクラス1年拾組の担任 萌黄もえぎ 美春よしはる。
よろしくね」

萌黄先生は、耳にピアスをつけているものの。メガネをかけていて、
いかにも知性あふれる感じがし、優しそうだ

なぜか、ほっと安心してしまう

「拾組……って、阪本くんと同じ!?!」

ハッとした。

「もしかして、阪本と友達なのかい？」

「いや、なんと申しますか……殺されそうになったといひますか……。」

実際、ファースト コンタクト 第一印象が悪いだろ。

「それじゃあ……。」

さっそくですが杯を交わしましょうか？」「

「そうですね杯を交わしましょうか　・・・じゃなくて!!へ？
さ、杯!？」

「そうですねよ、それがこの黒歩学園の入学のしきたりです」

「だって、酒は飲んじゃダメでしょう!!!!」

「そんな、本当に酒を呑むわけ無いでしょう。実際の飲むのはオレ
ンジジューズです」

な、なんだそれ。

「杯を交わすって、なんかヤクザの人がすることみたいですね。は
はは」

軽い感じに笑ってみる

「黒歩学園はマフィアやヤクザ組織の幹部になるための知識を学ぶ・

・
・
・

別名 裏社会教育学校ですからね。そんなことは当然ですよ」

思わぬ。大問題発言。
俺は、耳を疑った。

よっしんぞ

「マフィア？ヤクザ？」

この先生なんて人だ、かなりの問題発言をさらっと言いやがった

あまりにナチュラルすぎる

「はい？どうかしましたか？」

「どうかしましたっていうほど落ち着ける内容じゃないですよね。そんなこと初めて聞いたんですけど！！！！
何ですか！？裏組織の幹部になるための知識を学ぶ学校って！！
かなり危ない場所じゃないですか！！！」

何かが、納得できた部分もあった。

朝のあの、惨劇は、ここがこういう学校だから……

「ふふふ、危ない場所と思うかもしれませんが。
今まで、近所の人から苦情きたことないんですよ」

キラキラの笑顔＋ドヤ顔の萌黄先生。

「まあ、とにかく、この黒歩に入ってきた以上潔く希里君もこつちの道があるこつじゃないですか」

「公務員の父親と至って普通な母親から、
なんでいきなり裏の道歩く子供ができるんですか！！！」

「郷に入っては郷に従え！！希里くんの両親からはもう学費を払ってもらっているの」

「どうもこうもないです！……では、杯を交わす準備を。」

「そっか……、両親はもう学費を払っている。」

俺は、この学園で青春を謳歌しなければならないのだ

。青春を満喫するというよりは、地獄を味わうような気がする……。

「お、俺の青春があああああ！！！！！！！！！！」

嘆く俺に、萌黄先生がポンと肩に手を乗せる

「案外、ここはね。芯が通っている学園だよ。すべてが怖いものじ

やないさ
卒業したときには、多分 体力面でも精神面でも強くなっていくと
思う」

「……、はい」

先生の言葉に何か、安心感を覚えた

「五反田希里君、黒歩学園へようこそ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4795v/>

back!!!

2011年11月22日03時58分発行